【35】

氏　名（国籍）	張（ちょん）　栄順（よんすん）（韓　国）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　甲　第　2743　号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	谷崎潤一郎と大正期の大衆文化表象 —女性・浅草・異国—

主　査	筑波大学教授		名波弘彰
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	荒木正純
副　査	筑波大学教授		池内輝雄
副　査	筑波大学助教授		新保邦寛
副　査	筑波大学講師	博士（文学）	秋山　学

論文の内容の要旨

本論文は，谷崎潤一郎の大正期の文学作品を，文化表象として扱い，同時代の文化・風俗現象と比較考察することで，大正期の谷崎文学を捉え直すことを目的としたものである。

著者は上記の課題を，「女性」「浅草」「異国」という三つのテーマに絞り，それぞれのテーマに沿う考察をもって本論文を構成している。その構成は以下の通りである。

序章
第Ⅰ部　女性表象
　第一章　〈新しい女〉像と谷崎潤一郎「秘密」—「秘密」論—
　第二章　一九一〇年代の毒婦の芝居と谷崎の描く女性—「饒太郎」論—
第Ⅱ部　浅草表象
　第三章　「堕落」を夢見る小僧—「小僧の夢」論—
　第四章　祝祭空間としての浅草—「魔術師」論—
　第五章　谷崎潤一郎の浅草表象と脚色される支那趣味—「鮫人」論—
第Ⅲ部　異国表象
　第六章　戯曲「象」における「南洋」表象—「象」論—
　第七章　大衆文化としての「映画劇」成立と谷崎潤一郎—「人面疽」論—
　第八章　文化の翻訳としての映画物語—「肉塊」論—
結章

第Ⅰ部「女性表象」の第一章では作品「秘密」を対象に，また第二章では作品「饒太郎」を対象にして，それぞれに登場する女性像を文化史的な観点から論じている。谷崎が戯曲「創造」によって文学界に登壇した時期は，「新しい女」を標榜する女性解放運動が社会風俗としても話題になり始める時期であった。この第Ⅰ部ではその運動の社会的広がりに留意して，この〈新しい女〉象を比較考察の一方の対象にし，谷崎が都市における女性像を

どのように描いたかを解明している。その解明に当って，谷崎がこの時期多くの戯曲を書いたことを踏まえ，近代演劇の女優との関わりをも考察している。この二章においては，性風俗の大衆文化に対する谷崎の視線は，政治的・社会的な既成の束縛から解放された〈新しい女〉をめざす女性解放論的思潮にあったのではなく，大衆文化のなかで出現し風俗現象として広まった〈新しい女〉像にあったというのが著者の主張である。当時〈新しい女〉の外見的な新しさとそこから想起される自由奔放さは，大衆文化の低俗的娯楽性と結び付くがゆえに，批判される対象となっていた。しかしこの二作品にあっては，逆に「T女」や「お縫」という女性の造型に〈新しい女〉を見出すことで，谷崎の〈新しい女〉像は，いわば女性存在を既成の文化的価値観を破壊する象徴的な存在として描いていると結論づけている。

第Ⅱ部「浅草表象」の第三章から第五章にかけては，小説空間「浅草」が小説構成の中で重要な役割を占めている作品を考察している。すなわち，第三章では作品「小僧の夢」，第四章では作品「魔術師」，第五章では作品「鮫人」をそれぞれ対象とし，方法的には第Ⅰ部と同じく，同時代の浅草をめぐる言説と比較考察することで，谷崎作品における浅草表象と谷崎自身の大衆文化観との関連を浮かび上がらせている。当時の知識人たちにとって，娯楽地としての浅草は取り締るべき文化空間であり，そこに集う人々－「民衆」「大衆」－は教育すべき対象と見なされていた。それに対して，これらの文学作品はそのような既成の認識にまっこうから対立し，大衆の娯楽地「浅草」を新しい文化創造の場として捉えていると結論づけている。

第Ⅲ部「異国表象」では，対象作品に共通する異国的要素に注目し，それと混在して描かれている大衆文化表象との関わりを分析することで，谷崎において異国はいかなる位置を占め，どのような意味を持っていたのかを，特に各作品の主要登場人物が捉えているエキゾティシズムにおける二重性やレトリックに注目して考察している。たとえば，第六章の作品「象」では，江戸時代の民衆文化に入り込んでいた異国的な描写を中心に考察している。この作品は江戸時代の無分別な異国憧憬への民衆の視線を批判的に描くものであるとし，それは1910年代の「南蛮文学」の中に織り込まれている「南洋」表象が領土拡張政策の中で作られていることを比喩的に揶揄するものであったと結論づけている。第七章の作品「人面疽」と第八章の作品「肉塊」では，既成の道徳観では排除されたグロテスクやエロティシズムが当時芸術として認められていなかった映画と深く結びついている点に注目し，谷崎の作品では，排除されるべき文化が大衆に訴えかける価値を持つとし，それを映画という視覚メディアを通して大衆に流通させていくことに新たな文化価値を生み出していく可能性があると，むしろ積極的に評価していると結論づけている。

審査の結果の要旨

本論文は，谷崎文学の中で評価のあまり高くない大正期の諸作品が同時代の大衆文化・風俗に対する既成の観念と鋭く対立する内容を含んでいることに着目し，表象分析の方法によってその対立を考察しようとしたものである。著者の研究は表象分析と同時代の文化現象との関係を丹念に結びつけてゆくというもので，その姿勢が表象として設定した「女性」「浅草」「異国」の各部にわたる作品分析につらぬかれている。その際に著者は，最新の文学理論であるジェンダー論，ポスト・コロニアリズム，都市論，メディア論，映像文化論を多角的に駆使していて，その視座と方法が谷崎文学を文化史との交渉の中で読み解くといった結果につながっている。それは単に谷崎文学を文学史のパラダイムの中で読み直すという作業を越えるものであり，また大正期の谷崎文学にみられる表象叙述がそのまま谷崎文学の思想となっていることをも明らかにすることになった。大衆文化に対する谷崎潤一郎の積極的で肯定的な評価は同時代の定型化した文化観念を越えた先鋭性が認められるとし，その方向性は次の時代に訪れる文化思潮を先取りしているというのが著者の結論になっている。それは従来の研究史に新たな成果を加えるものであって，その一部はすでに学界において高く評価されている。

このように優れた視座と方法は評価できるが，あえて欠点を指摘するとすれば，それが漸次に獲得されたこと

が本論文の表象分析に精粗をもたらしているといえる。著者自身は精粗の解消に努めてはいるが，完全には克服されていない。さらに言えば本論文には大正期の諸作品に至る明治期の谷崎作品の表象分析をも加えているが，明治期の谷崎作品と同時代の文化史の関係は大正期のそれとは異質でって，その異質性の検討が不十分である。

以上を総括して言えば，若干の欠点は見られるものの，その欠点が本論文の視座の斬新性と方法論の多様性，さらには大正期の谷崎文学における可能性を導き出した結論の豊かさを減少するものではないと判断される。その点で，本論文は当該研究に寄与するところきわめて大きいと言える。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。